

デイヴィドソンとブラックの隠喩論

渡邊 智宏

意味とは何かという問いに対する理論を意味論というが、その代表的なものであるデイヴィドソンの真理条件的意味論は文の意味をその真理条件だとするものである。隠喩について、私たちはふつう隠喩は字義通りの意味とは異なる内容を意味していると考えがちである。しかし、文の意味を真理条件だと考え、一つの文だけでなく当該言語に含まれる他の多くの文全体との関連から意味を考えるとすれば、そのような通常でない意味は採用できない。本研究では、一見するとどのようなものなのかうまく説明ができないように見える隠喩の意味についてどのように解釈すれば納得できる説明ができるのか考察した。

隠喩をどのように解釈すべきなのか明らかにするために、本研究では真理条件的意味論を主張するデイヴィドソンと、隠喩についてデイヴィドソンと対立する意見を主張するブラックという二人の哲学者の意見を取り上げる。この二人は、隠喩が物事の新たな局面に目を向けさせること、意外な共通点や類似性に気付かせること、物事のある細部を抑え、ある細部を強調するという効果を持つということについては同意している。二人の意見の相違点はそれらの効果がどのようにもたらされるのかということにある。デイヴィドソンが主張するのは隠喩には字義通りの意味以外の特殊な意味ではなく、隠喩の効果は意味ではなくその使用によるものだという語用論的な解釈である。対してブラックは意味論的に考え、隠喩には二つの主題があり、副主題から連想される通念の体系が第一主題に帰属されたものが隠喩の意味であるという説明をしている。

両者が互いの立場に対して行った批判を手掛かりとしてそれぞれの問題点を検討すると、ブラックの隠喩論には通常の文ではなしえない効果を意味によって説明しようとするところについての矛盾があり、デイヴィドソンの隠喩論には隠喩の作者がどのように隠喩を作り出すか説明できないという問題があった。デイヴィドソンの問題については、青山晋也が提示した当座理論を使って隠喩の解釈を説明できるとする説を受け入れるならば解決することが出来る。だがその場合には隠喩の意味はただ一つの内容に限定されることになり、容易には表現することが不可能な隠喩的意味があることを説明できない。デイヴィドソン、ブラックによる批判はその多くが隠喩の説明に語用論的考え方、あるいは意味論的考え方の欠点に対するもので、そのため当初は二人の論争からわかる最も重要な隠喩の問題は語用論と意味論のどちらの考え方を採るべきなのかということのように思えた。しかしここまでの考察により語用論的、意味論的考え方の両方がどうしても避けられない重大な問題をはらんでいることがわかり、それら二つの立場のうちどちらかだけで考えようとするならば隠喩について完全な説明はできないという見解に至った。そこで、隠喩には語用論的に解釈すべき部分と意味論的に解釈すべき部分の両方があるとする説を提案した。

(指導教員 横山幹子)